

日本医師会インターネット生涯教育協力講座＜アトピー性皮膚炎における外用療法の実際＞

アトピー性皮膚炎治療の現状 - 4

タクロリムス軟膏
抗ヒスタミン薬・抗アレルギー薬

● 総監修 ●

東京逋信病院皮膚科

江藤 隆史

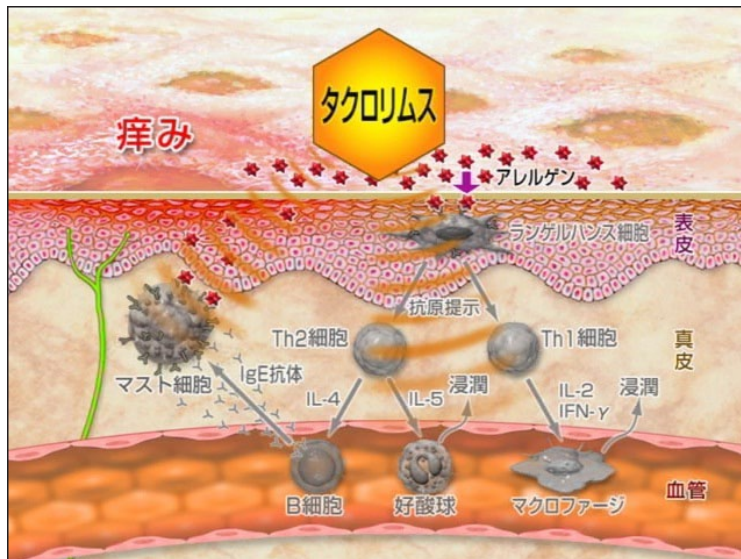
タクロリムス軟膏 抗ヒスタミン薬・抗アレルギー薬

- ◆ステロイド外用薬とタクロリムス軟膏に加え、保湿剤や抗ヒスタミン薬、抗アレルギー薬をどう選択し、組み合わせて使用するかが、治療の経過を左右する。

【1】タクロリムス軟膏

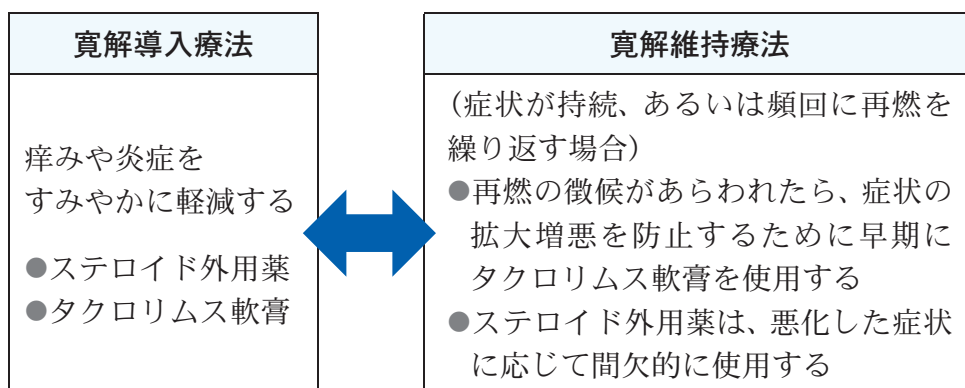
○タクロリムスの作用機序

- タクロリムスは、ヘルパー T 細胞およびランゲルハンス細胞の機能を抑制し、好酸球の浸潤と活性化、マクロファージの浸潤を抑え、炎症を軽減する。
- また、mast細胞からのヒスタミンなどの放出を抑え、神経線維の表皮への伸張を抑制することによって痒みを軽減する。



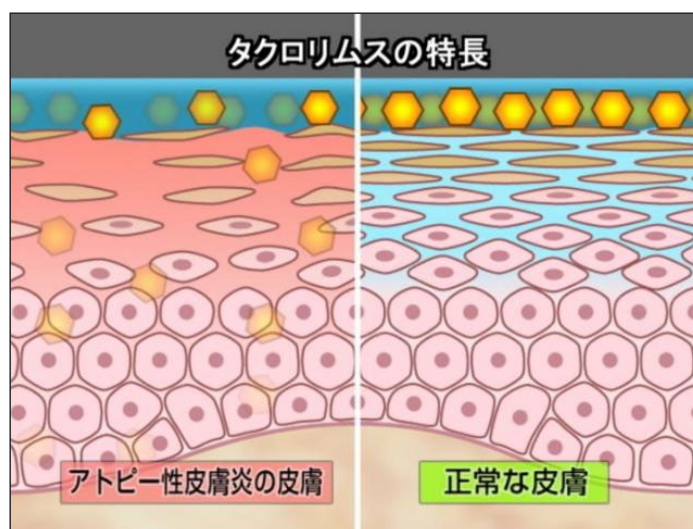
○タクロリムス軟膏の位置づけ

- 日本皮膚科学会の「診療ガイドライン」でも、寛解導入療法、寛解維持療法において、タクロリムス軟膏はステロイド外用薬と並び位置づけられている。



○タクロリムス軟膏の特徴

- タクロリムス軟膏のステロイド外用薬との最も大きな違いは、分子量が大きく、正常な皮膚からは吸収されにくいことである。病変局所では吸収されやすく、効果を発揮する一方、皮膚炎が軽快してくると吸収が低下し、副作用も生じにくいという特長がある。



○安全性および使用上の注意

- 安全性については、長期投与の検討からも大きな問題はないと考えられている。
- 使用上の注意として、以下があげられる。
 - 外用開始時に灼熱感などの刺激がみられる。
 - 皮膚の局所感染症を悪化させる可能性がある。

【2】抗ヒスタミン薬、抗アレルギー薬

◆抗ヒスタミン薬や抗アレルギー薬を中心とする内服療法は、主に炎症の抑制と痒みの抑制について外用療法を補助する治療と位置づけられている。

○アトピー性皮膚炎に用いられる主な抗ヒスタミン薬、抗アレルギー薬

- アトピー性皮膚炎に用いられる抗ヒスタミン薬、抗アレルギー薬には、表のような種類が用いられる。

アトピー性皮膚炎に用いられる抗ヒスタミン薬、抗アレルギー薬		
▼ 第一世代抗ヒスタミン薬		
系列	一般名	代表的な商品名
エタノールアミン系	ジフェンヒドラミン塩酸塩	レスタミン、ペナ
	ジフェニルピラリントキシル酸塩	プロコン、アギール
	クレマスチンフマル酸塩	タベジール
プロピルアミン系	クロルフェニラミンマレイン酸塩	ネオレスタミン
	d-クロルフェニラミンマレイン酸塩	ボララミン
	塩酸トリプロリジン	ベネン
フェノチアジン系	プロメタジン塩酸塩	ヒベルナ、ピレチア
	アリメマジン酒石酸塩	アリメジン
ピペラジン系	ホモクロルシクリジン塩酸塩	ホモクロミン
	ヒドロキシジン塩酸塩	アタラックス
	ヒドロキシジパモ酸塩	アタラックスP
ピペリジン系	シプロヘプタジン塩酸塩水和物	ペリアクチン
▼ 第二世代抗ヒスタミン薬		
	一般名	代表的な商品名
	ケトチフェンフマル酸塩	ザジテン
	アゼラスチン塩酸塩	アゼブチン
	オキサトミド	セルテクト
	メキタジン	ニボラジン、ゼスラン
	エメダスチンフマル酸塩	タレン、レミカット
	エピナスチン塩酸塩	アレジオン
	エバスチン	エバステル
	セチリジン塩酸塩	ジルテック
	ベボタスチンベシル酸塩	タリオン
	フェキソフェナジン塩酸塩	アレグラ
	オロパタジン塩酸塩	アレロック
	ロラタジン	クラリチン
▼ 抗ヒスタミン作用をもたない抗アレルギー薬		
	クロモグリク酸ナトリウム	インタール
	トラニラスト	リザベン
	スプラタストシル酸塩	アイビーディ

(日本アレルギー学会「アトピー性皮膚炎診療ガイドライン2009」より、改変)